

大学生における生活意識調査と ニート予備軍の研究

— 日本・韓国・ニュージーランド

3国比較の試み—

春 海 淳 子

寺 井 さ ち 子

【はじめに】

近年、フリーターやニート（NEET）¹といった不安定な就労形態、および就労しない若者に対する危機感が高まっている。厚生労働省の報告によると、2008年の若年層無業者（ニート）数は64万人（平成21年度版労働経済白書）であり2002年からほぼ横ばい状態である。白書によると、ニートと呼ばれる若年層無業者は19歳で出現の大きなピークを迎え、それ以降は23歳で再び上昇した後、徐々に数が減っていく。これは社会的に見ると、高卒者にとっての労働市場の冷え込みの影響が大きい（白井, 2005）こと、このところの世界的な不況から大卒者の労働市場の冷え込みが影響していることが考えられる。また、若年層無業者の学歴は、大学卒・大学中退者が34.9%で最も多く、全体から見ると中退者率が高いのがその特徴である（2003）。

ここで心理学的視点から眺めてみたい。フリーターやニート、パラサイトシングル、ひきこもりといった若者問題は、白井（2005）が、いずれも若者が社会と関わり大人になる過程での困難、あるいは家族からの自立の問題が共通原因になっていると述べているように、社会的な影響を大きく受けるものであるには違いないが、個々人の心理的課題もまた非常に大きい問題であることは確かである。

1 15歳から34歳の非労働人口のうち家事も通学もしていない若年無業者

2010年に次々と明るみに出た「高齢者死亡無届事件」の発覚は、白井が触れたような日本の家庭内における共生関係の存在とその結末を、世間の目に具体的な形で知らしめた。親の収入や世話に長期的に頼りパラサイト化した高齢の子どもと、そうした彼らをいつまでも自立へと向かわせなかった親の成れの果ての姿である。そのような彼らは、まさに現代ニートのさきがけとも呼べる人々である。家庭内を中心にひっそりとそしてずるずると生きてきた彼らにとっては、親の死を受け入れ、一定の喪の作業を外部にたいしても自分に対しても行うことが出来ない。ましてやそこから新たな生活に足を踏み出すなどといった「新しい取り組み」は、心理的にも社会活動的にも極めて困難なのである。それらに正面から対処できない彼らにとっては「親は死んでいない」ことにして歴史を変えないまま、同じニート暮らしを続ける方がよほど容易であった。

さて寺井（2007、2010）はこれまでのニート研究において、心理的行き詰まりを示したニート予備軍あるいはニート青年の臨床例を多く示しているが、こうした人々は、年齢層を広げながら現在も町のあちこちに存在している。日本の彼らは、ニート問題発祥の地となったイギリスのように、青年期になると実家から独立することが当たり前でホームレス者へと直結しやすい国とは異なり、その多くが親の庇護のもとで過ごしているため、その対応への社会的切迫度が低く、支援対策も後手になってしまいがちであった。しかしひきこもり研究の第一人者である斉藤環（2010）は、「2030年問題」と名付けて引きこもり青年の高齢化問題に警鐘を鳴らしている。すなわち、現在「引きこもり第一世代」と呼ばれる40代を過ぎた元青年たちがこのまま年齢を重ね、彼らを養い続けている親が亡くなってしまいう頃には、年金未加入のままニート老人と化した彼らの処遇が深刻な社会事態として浮上するというのである。

先輩格であるイギリスでは、既にニート青年あるいはニート予備軍へのカウンセリング、職業訓練やシェルター（ホームレスにならないための一時的住まい）の提供など社会的・心理的援助が進んでいると聞くが、日本のニート問題はまだその深刻さすら世間に共有されてはいない。

こうした社会状況のもと、筆者らは日本の様子に将来的危機感を抱きつつニート問題に取り組んできた。そしてニート問題は幅広い視野から考える必要があ

るとの観点から、今回はその研究の一つとして、ニートに関する海外比較を試みることを考えた。

そこで本稿では、日本と、日本と共通項が多くそれゆえ似た問題も多く抱える韓国、そして南半球という位置にありながら西欧諸国に属し、比較的社会福祉の安定した国と認められてきたニュージーランドの三国間で、大学生への大学生生活意識調査とニート予備軍に関する研究を行い、各国間の若者の意識の違いやその理由などについて検討することにした。

【目的】

大学生の中にニート予備軍となり得る者が存在すると考え、まず日本・韓国・ニュージーランドの大学生の生活意識調査を実施し、その内実を明確にすると同時にその三国間比較を試みる。

【方法】

調査対象者

日本・韓国・ニュージーランドの大学生 282名

(日本：男性22名(8%)・女性82名(29%)・計104名(37%))

韓国：男性39名(14%)・女性44名(15%)・(不明1名)・計84名(30%)

ニュージーランド：男性33名(12%)・女性61名(22%)・計94名(34%)

調査時期

韓国人大学生には2007年10月～11月。同一条件・一斉指導によるアンケート調査を、韓国在住日本人に依頼して実施した。ニュージーランドでは2008年8月に調査者が現地に出向いて直接実施した。日本人には2009年4月中旬に、韓国やニュージーランドの大学と条件の似た私立大学において同一条件・一斉指導で実施した。

調査内容

大学生生活不安尺度は藤井義久(1998)を使用。質問項目は「日常生活不安」が13項目、「評価不安」が11項目、「大学不適応」が5項目の29問からなる。ニートに関する質問は、独自に以下の10問を用意し、はい・いいえで回答を求めた。

- ①あなたの性別（男・女）。
- ②卒業後は自分の志望どおりに進んでいく自信がある。
- ③ニートになる人は怠け者だと思う。
- ④なかなかやりたい仕事や進路が見つからない。
- ⑤時間や責任で縛られるのは嫌だ（以下「縛られるのは嫌だ」と略す）。
- ⑥自分の人生に自分で責任を持つのは重荷だ（以下「重荷だ」と略す）。
- ⑦自分もニートや引きこもりになるかもしれないという不安がある（以下「ニート不安」と略す）。
- ⑧誰かが養ってくれるならニートになりたい（以下「ニート願望」と略す）。
- ⑨私は他人に関心があり、人間関係はどちらかというと得意である（以下「人間関係」と略す）。
- ⑩今、自分が何をしたいか決められない。

韓国用アンケート用紙・ニュージーランド（以下 NZ と略記）用アンケート用紙は、日本人に向け作成した内容を、全てそのまま正確に韓国語および英語に翻訳して使用した。

【結果】

1. 日本・韓国・ニュージーランドの三国比較

1) 国別による大学生生活不安尺度得点の差の検定結果

国の違いによる大学生生活不安尺度得点に違いが見られるかどうかを調べるために分散分析を行った（表 1）。その結果を表 2 に示す。F 検定の結果、大学生生活不安尺度の総得点においては、 $F(2, 265) = 8.48$ となり $p < .01$ で、国の主効果が有意であった。Tukey の多重比較検定をしたところ、日本と韓国は NZ よりも大学生活での不安がより大きいことがわかった。

下位尺度においては「日常生活不安」では、 $F(2, 272) = 8.78$ となり $p < .01$ で、国の主効果が有意であった。Tukey の多重比較検定をしたところ、日本と韓国は NZ よりも日常生活での不安がより大きいことがわかった。

「評価不安」では、 $F(2, 273) = 5.70$ となり $p < .01$ で、国の主効果が有意であった。Tukey の多重比較検定をしたところ、日本と韓国は NZ よりも評価に

対する不安がより大きいことがわかった。

「大学不適應」では $F(2, 277) = 5.85$ となり $p < .01$ となり、国の主効果が有意であった。Tukey の多重比較検定をしたところ、韓国は日本、NZ よりも大学に不適應だと感じている不安がより大きいことがわかった。

表 1 国の違いによる大学生生活不安尺度得点の差の検定結果

	国						F値	多重比較
	①日本		②韓国		③NZ			
	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)		
日常生活不安	6.62	(2.68)	6.43	(3.48)	5.01	(2.43)	8.78	①,②>③*
評価不安	6.51	(2.57)	6.81	(2.99)	5.50	(2.57)	5.70	①,②>③*
大学不適應	.66	(1.08)	1.29	(1.64)	.76	(1.20)	5.85	②>①,③*
総得点	13.80	(4.92)	14.63	(6.55)	11.38	(4.68)	8.48	①,②>③*

2) 日本、韓国、NZ におけるニートに関する意識の関係

日本、韓国、NZ の国別によるニートに関する意識の関係を調べるためにクロス集計を用いて χ^2 乗検定を行った。その結果を表 2 に示す。国別による有意な差が見られた項目は 7 項目のうち、「自信」、「縛られ感」、「責任」、「決められない」の 4 項目であった。「卒業後は自分の志望通りに進んでいく自信がある」と答えた者は $\chi^2(2) = 72.7$ ($p < .001$) となり、日本は志望通りに進んでいく自信があると答えた者の率は NZ に比べると、2 分の 1 以下となった。「時間や責任でしぼられるのは嫌だ」と答えた者は $\chi^2(2) = 24.0$ ($p < .001$) となり「時間や責任でしぼられるのは嫌だ」と答えた者の率は NZ よりも、日本、韓国が多いことが分かった。「自分の人生に自分で責任を持つのは重荷だ」と答えた者は $\chi^2(2) = 31.7$ ($p < .001$) となり、「人生に自分で責任を持つのは重荷である」と答えた韓国の率は NZ の 2 倍を上回る高い数値を示した。「今、自分が何をしたいか決められない」と答えた者は $\chi^2(2) = 16.3$ ($p < .001$) となり、韓国の「自分が何をしたいか決められない」と答えた者の率が NZ よりも多かった。

表2 日本・韓国・NZにおけるニートに関する意識の関係

			国別			
			日本	韓国	NZ	
自信	はい	度数	31	51	84	
		%	29.8	60.7	89.9	
		調整済み残差	-7.6	.5	7.3	**
	いいえ	度数	73	32	10	
		%	70.2	38.1	10.6	
		調整済み残差	7.6	-5	-7.3	
縛られ感	はい	度数	68	59	35	
		%	65.4	70	37.2	
		調整済み残差	2.1	2.8	-4.9	**
	いいえ	度数	36	25	59	
		%	34.6	29.8	62.8	
		調整済み残差	-2.1	-2.8	4.9	
責任	はい	度数	35	45	13	
		%	33.7	53.6	13.8	
		調整済み残差	.2	4.8	-4.8	**
	いいえ	度数	69	39	81	
		%	66.3	46.4	86.2	
		調整済み残差	-2	-4.8	4.8	
ニート不安	はい	度数	33	27	12	
		%	31.7	32.1	12.8	
		調整済み残差	1.9	1.6	-3.5	n.s.
	いいえ	度数	70	57	82	
		%	67.3	67.9	87.2	
		調整済み残差	-1.9	-1.6	3.5	
ニート願望	はい	度数	11	22	12	
		%	10.6	26.2	12.9	
		調整済み残差	-1.9	3.1	-1.0	n.s.
	いいえ	度数	93	61	81	
		%	89.4	72.6	87.1	
		調整済み残差	1.9	-3.1	1.0	
決められない	はい	度数	44	42	21	
		%	42.3	50.0	22.3	
		調整済み残差	1.2	2.8	-3.9	**
	いいえ	度数	59	41	73	
		%	56.7	48.8	77.7	
		調整済み残差	-1.2	-2.8	3.9	

1. 国別のニート意識と大学生生活不安尺度の関係

1) 日本におけるニート意識と大学生生活不安尺度の関係

表 3. 日本におけるニート意識と大学生生活不安尺度の差の検定 (t 検定)

		自信		嫌だ		重荷だ		ニート不安		ニート願望		決められない	
		M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)
日常生活不安	はい	6.23	(2.76)	7.09	(2.88)	7.41	(2.70)	7.59	(2.80)	5.90	(1.85)	7.30	(2.32)
	いいえ	6.79	(2.64)	5.78	(2.04)	6.22	(2.60)	6.21	(2.51)	6.70	(2.74)	6.16	(2.84)
評価不安	はい	6.13	(2.36)	6.84	(2.59)	7.32	(2.63)	7.30	(3.00)	5.91	(2.62)	7.05	(2.65)
	いいえ	6.67	(2.65)	5.92	(2.45)	6.12	(2.47)	6.17	(2.28)	6.59	(2.57)	6.16	(2.46)
大学不適応	はい	.71	(1.27)	.79	(1.19)	.77	(1.11)	.91	(.95)	1.18	(.87)	.81	(1.16)
	いいえ	.64	(1.00)	.42	(.81)	.60	(1.07)	.49	(1.05)	.60	(1.09)	.49	(.92)
総合得点	はい	13.17	(4.92)	14.76	(5.30)	15.61	(4.82)	15.88	(5.27)	13.10	(4.10)	15.10	(4.61)
	いいえ	14.06	(4.93)	12.11	(3.66)	12.89	(4.74)	12.82	(4.48)	13.88	(5.01)	12.86	(4.99)

(1) 総合得点の結果

- ① 「なかなかやりたい仕事や進路が見つからない」の平均値を比較したところ (t (97) =2.08 (p<.05))、やりたい仕事や進路が見つからない学生の方が大学生生活不安が高いことがわかった。
- ② 「時間や責任で縛られるのは嫌だ」の平均値を比較したところ (t (93.443) =2.93 (p<.01))、時間や責任で縛られるのが嫌だと感じている学生の方が大学生生活不安が高いことがわかった。
- ③ 「自分の人生に自分で責任を持つのは重荷だ」の平均値を比較したところ (t (97) =2.67 (p<.01))、自分の人生に自分で責任を持つのが重荷だと感じている学生の方が大学生生活不安が高いことがわかった。
- ④ 「自分もニートや引きこもりになるかもしれないという不安がある」の平均値を比較したところ (t (96) =2.99 (p<.01)) ニート不安がある学生の方が大学生生活不安が高いことがわかった。
- ⑤ 「今、自分が何をしたいか決められない」の平均値を比較したところ (t (96) =2.27 (p<.05))、自分が何をしたいか決められない学生の方が大学生生活不安が高いことがわかった。

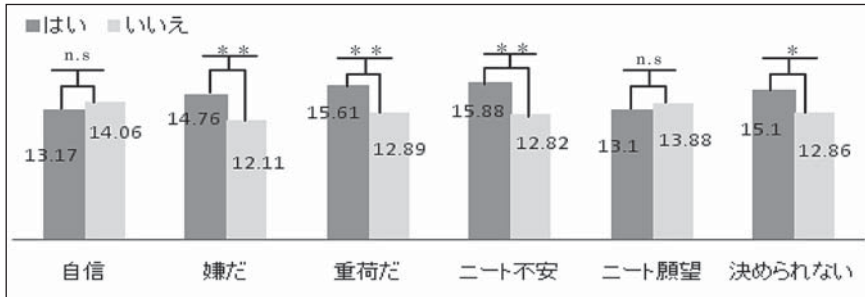


図1 日本における総合得点の結果

(2) 下位尺度（日常生活不安尺度・評価不安尺度・大学不適応尺度）の結果

- ① 「なかなかやりたい仕事や進路が見つからない」の平均値を比較したところ、やりたい仕事や進路が見つからない学生の方が日常生活不安 ($t(99) = 2.13$ ($p < .05$)) が高いことがわかった。
- ② 「時間や責任で縛られるのは嫌だ」の平均値を比較したところ、時間や責任で縛られるのが嫌だと感じている学生の方が日常生活不安 ($t(92.815) = 2.67$ ($p < .01$)) が高いことがわかった。
- ③ 「自分の人生に自分で責任を持つのは重荷だ」の平均値を比較したところ、人生に自分で責任を持つのが重荷だと感じている学生の方が日常生活不安 ($t(99) = 2.15$ ($p < .05$))、評価不安 ($t(101) = 2.29$ ($p < .05$)) が高いことがわかった。
- ④ 「自分もニートや引きこもりになるかもしれないという不安がある」の平均値を比較したところ、ニート不安がある学生の方が日常生活不安 ($t(98) = 2.48$ ($p < .05$)) が高いことがわかった。
- ⑤ 「今、自分が何をしたいか決められない」の平均値を比較したところ、自分が何をしたいか決められない学生の方が日常生活不安 ($t(98) = 2.16$ ($p < .05$)) が高いことがわかった。なお、大学不適応尺度には、どの項目も有意差が見られなかった。

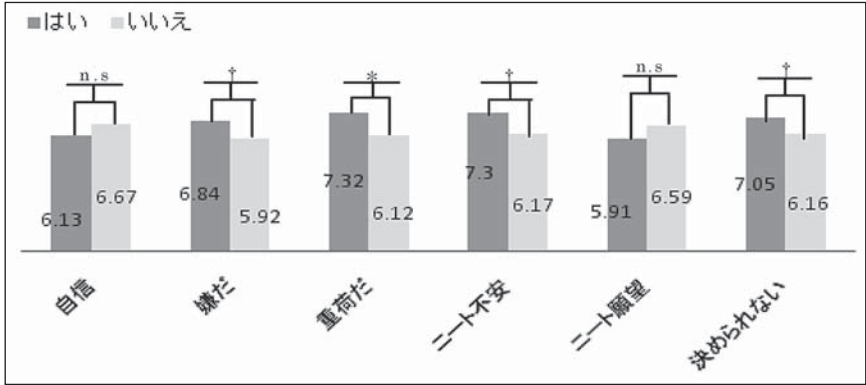


図2. 日本における評価不安の平均の差

2) 韓国におけるニート意識と大学生生活不安尺度の関係 (表3)

表4. 韓国におけるニート意識と大学生不安尺度の差の検定 (t検定)

		自信		嫌だ		重荷だ		ニート不安		ニート願望		決められない	
		M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)
日常生活不安	はい	5.76	(3.21)	7.09	(3.45)	7.55	(3.22)	8.59	(2.71)	7.73	(3.21)	7.07	(3.50)
	いいえ	7.41	(3.71)	4.83	(3.05)	5.13	(3.34)	5.36	(3.33)	5.88	(3.46)	5.74	(3.40)
評価不安	はい	6.06	(2.99)	7.29	(2.79)	7.78	(2.69)	8.96	(2.05)	7.67	(2.72)	7.43	(2.65)
	いいえ	8.06	(2.65)	5.63	(3.20)	5.66	(2.96)	5.77	(2.82)	6.44	(3.54)	6.18	(3.26)
大学不適合	はい	1.04	(1.54)	1.39	(1.68)	1.36	(1.58)	1.89	(1.78)	1.50	(1.77)	1.52	(1.82)
	いいえ	1.72	(1.75)	1.04	(1.54)	1.21	(1.72)	1.00	(1.50)	1.21	(1.61)	1.07	(1.42)
総合得点	はい	12.96	(6.22)	15.76	(6.51)	16.68	(5.74)	19.44	(4.45)	17.05	(6.88)	16.02	(6.44)
	いいえ	17.29	(6.37)	11.78	(5.85)	12.19	(6.68)	12.22	(6.11)	13.64	(6.23)	13.16	(6.50)

(1) 総合得点の結果

- ① 「卒業後は自分の志望どおりに進んでいく自信がある」の平均値を比較したところ ($t(78) = 3.00$ ($p < .01$)), 卒業後は自分のどおりに進んでいく自信がない学生の方が大学生活不安が高いことがわかった。
- ② 「時間や責任で縛られるのは嫌だ」の平均値を比較したところ ($t(79) = 2.55$ ($p < .05$)), 時間や責任で縛られるのが嫌だと感じている学生の方が大学生活不安が高いことがわかった。

- ③「自分の人生に自分で責任を持つのは重荷だ」の平均値を比較したところ ($t(79) = 3.26$ ($p < .01$))、自分の学生に自分で責任を持つのが重荷だと感じている学生の方が大学生活不安が高いことがわかった。
- ④「自分もニートや引きこもりになるかもしれないという不安がある」の平均値を比較したところ ($t(79) = 5.46$ ($p < .01$))、ニート不安がある学生の方が大学生活不安が高いことがわかった。
- ⑤「誰かが養ってくれるならニートになりたい」の“平均値を比較したところ ($t(78) = 2.09$ ($p < .05$))、ニート願望がある学生の方が大学生活不安が高いことがわかった。

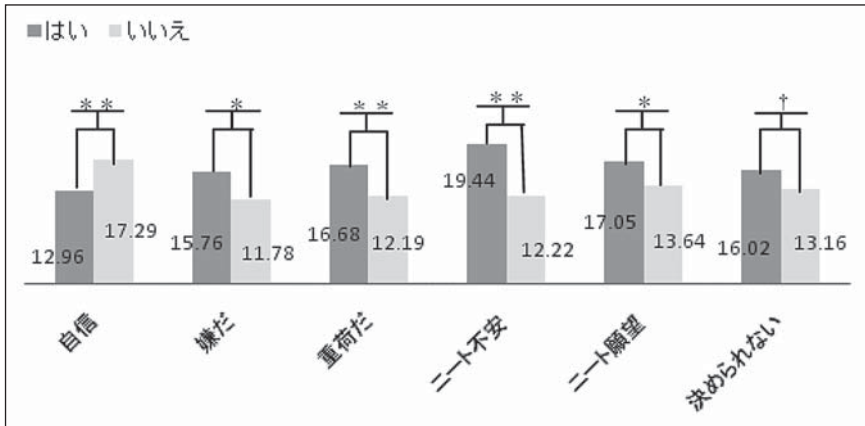


図3. 韓国における総合得点の差の結果

(2) 下位尺度（日常生活不安尺度・評価不安尺度・大学不適応尺度）の結果

- ①「卒業後は自分の志望どおりに進んでいく自信がある」の平均値を比較したところ、卒業後は自分の志望通りに進んでいく自信がない学生の方が日常生活不安 ($t(79) = 2.13$ ($p < .05$)) 及び、評価不安 ($t(80) = 3.07$ ($p < .01$)) が高いことがわかった。
- ②「時間や責任で縛られるのは嫌だ」の平均値を比較したところ、時間や責任で縛られるのが嫌だと感じている学生の方が日常生活不安 ($t(80)$

=2.78 ($p<.01$) および、評価不安 ($t(81) = 2.36$ ($p<.05$)) が高いことがわかった。

- ③ 「自分の人生に自分で責任を持つのは重荷だ」の平均値を比較したところ、自分の人生に自分で責任を持つのが重荷だと感じている学生の方が日常生活不安 ($t(80) = 3.33$ ($p<.01$)) 及び、評価不安 ($t(81) = 3.41$ ($p<.01$)) が高いことがわかった。
- ④ 「自分もニートや引きこもりになるかもしれないという不安がある」の平均値を比較したところ、ニート不安がある学生の方が日常生活不安 ($t(80) = 4.38$ ($p<.01$))、評価不安 ($t(81) = 5.24$ ($p<.01$))、大学不適応 ($t(82) = 2.39$ ($p<.05$)) の全ての下位尺度が高いことがわかった。
- ⑤ 「誰かが養ってくれるならニートになりたい」の平均値を比較したところ、ニート願望のある学生の方が日常生活不安 ($t(79) = 2.18$ ($p<.05$)) が高いことがわかった。

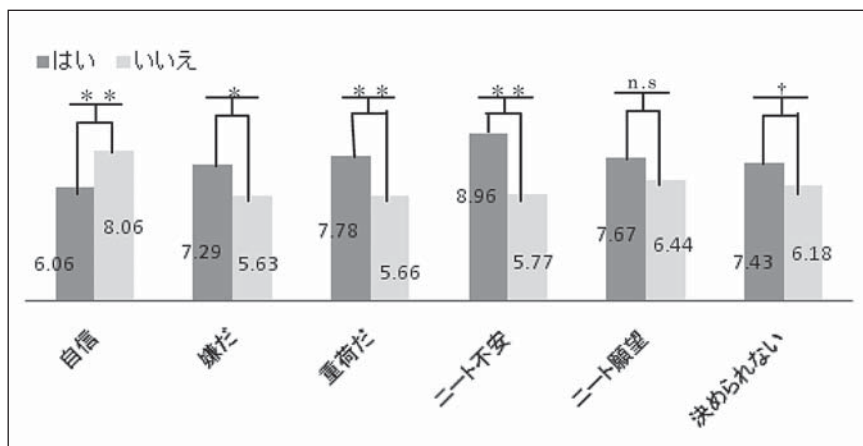


図4. 韓国における評価不安の差の結果

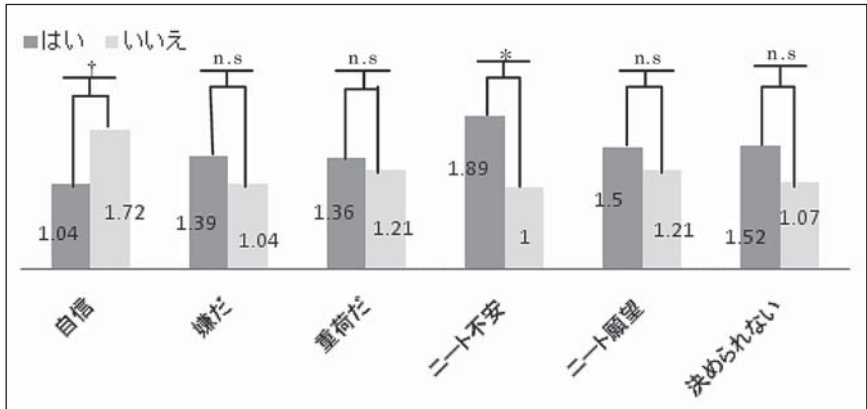


図5. 韓国における大学不適応の差の結果

3) ニュージーランドにおけるニート意識と大学生生活不安尺度の関係 (表2)

表5. ニュージーランドにおけるニート意識と大学生不安尺度の差の検定 (t 検定)

		自信		嫌だ		重荷だ		ニート不安		ニート願望		決められない	
		M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)
日常生活不安	はい	4.80	(2.31)	5.44	(2.71)	6.58	(2.43)	6.08	(2.64)	5.58	(2.88)	5.60	(2.84)
	いいえ	6.70	(2.87)	4.76	(2.24)	4.78	(2.36)	4.85	(2.38)	4.95	(2.38)	4.85	(2.31)
評価不安	はい	5.49	(2.57)	5.29	(2.44)	6.31	(1.89)	6.09	(1.87)	6.00	(2.53)	5.52	(2.52)
	いいえ	5.60	(2.76)	5.64	(2.66)	5.36	(2.66)	5.42	(2.65)	5.42	(2.60)	5.49	(2.60)
大学不適応	はい	.63	(1.08)	0.71	(1.13)	2.23	(1.59)	1.45	(1.37)	1.33	(1.61)	2.05	(1.56)
	いいえ	1.90	(1.60)	.79	(1.25)	.53	(.94)	0.67	(1.16)	0.69	(1.12)	0.39	(.74)
総合得点	はい	11.01	(4.58)	11.41	(4.68)	15.25	(3.84)	13.91	(3.81)	13.36	(4.50)	13.20	(5.21)
	いいえ	14.20	(4.73)	11.35	(4.28)	10.76	(4.35)	11.01	(4.70)	11.12	(6.23)	10.84	(4.41)

(1) 総合得点の結果

- ① 「卒業後は自分の志望どおりに進んでいく自信がある」の平均値を比較したところ $t(86) = -2.07$ ($p < .05$)、卒業後は自分のどおりに進んでいく自信がない学生の方が大学生生活不安が高いことがわかった。
- ② 「自分の人生に自分で責任を持つのは重荷だ」の平均値を比較したところ ($t(86) = 3.25$ ($p < .00$))、自分の学生生活に自分で責任を持つのが重荷だ

と感じている学生の方が大学生生活不安が高いことがわかった。

- ③「今、自分が何をしたいか決められない」の平均値を比較したところ ($t(86) = 2.02$ ($p < .05$)), 自分が何をしたいか決められない学生の方が大学生生活不安が高いことがわかった。

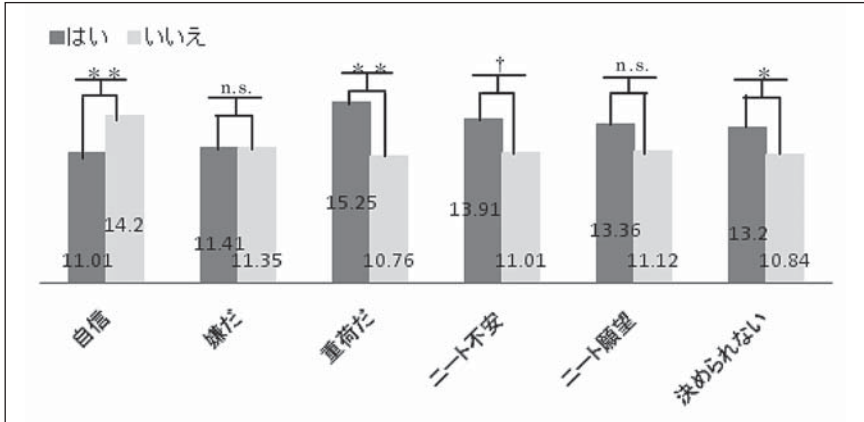


図6 ニュージーランドにおける総合得点の結果

(2) 下位尺度 (日常生活不安尺度・評価不安尺度・大学不適応尺度) の結果

- ①「卒業後は自分の志望どおりに進んでいく自信がある」の平均値を比較したところ、卒業後は自分の志望通りに進んでいく自信がない学生の方が日常生活不安 ($t(90) = -2.38$ ($p < .05$)) 及び、大学不適応 ($t(10.02) = -2.46$ ($p < .05$)) が高いことがわかった。
- ②「時間や責任で縛られるのは嫌だ」の平均値を比較したところ、時間や責任で縛られるのが嫌だと感じている学生の方が日常生活不安 ($t(80) = 2.78$ ($p < .01$)) が高いことがわかった。
- ③「自分の人生に自分で責任を持つのは重荷だ」の平均値を比較したところ、自分の人生に自分で責任を持つのが重荷だと感じている学生の方が日常生活不安 ($t(90) = 2.47$ ($p < .05$)) 及び、大学不適応 ($t(13.4) = 3.76$ ($p < .00$)) が高いことがわかった。
- ④「なかなかやりたい仕事や進路が見つからない」の平均値を比較したと

ころ、やりたい仕事や進路が見つからない学生の方が大学不適応 ($t(31.85) = 2.49 (p < .05)$) が高いことがわかった。

⑤「自分もニートや引きこもりになるかもしれないという不安がある」の平均値を比較したところ、ニート不安がある学生の方が大学不適応 ($t(91) = 2.07 (p < .05)$) が高いことがわかった。

⑥「今、自分が何をしたいか決められない」の平均値を比較したところ自分が何をしたいか決められない学生の方が大学不適応 ($t(22.68) = 4.71 (p < .05)$) が高いことがわかった。

なお、評価不安においてはいずれの項目にも有意差はみられなかった。

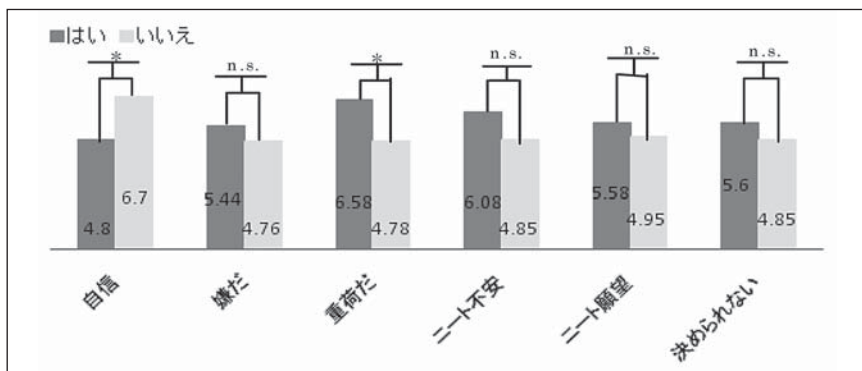


図7 ニューゼalandにおける日常生活不安得点の結果

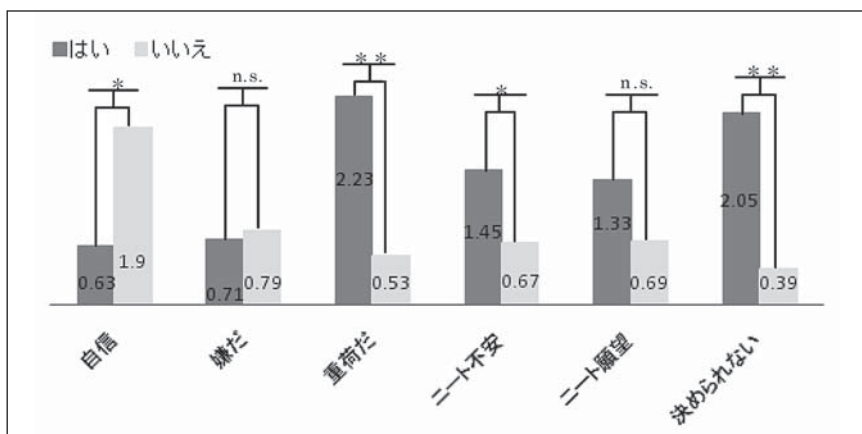


図8 ニューゼalandにおける大学不適応得点の結果

【考察】

1. 大学生生活不安得点の三国比較

現代の日本社会における大学進学率はきわめて高いものとなっているが大学進学の意味合いや大学生生活の過ごし方・とらえ方は各個人によって、あるいは選ばれる大学によってさまざまに異なっている。高学歴主義やエリートへの志向性は根強くあるが、しかし多くの若者は取り敢えず大学へは行っておこうという風に大学時代をモラトリアム期間として捉え、そのように過ごす若者が日本では多いようである。しかし一昔前のように、大学卒業者であれば就職が安泰であるとか終身雇用の保障といった言説はこの世界的な不況下や少子高齢化社会にあっては通用しなくなってきた。そのため「とりあえず」といった選択や「入れた会社に終身雇用して貰う」といった安易な適応では立ち行かなくなり、その結果として若者の早期離職や転職願望などが問題となり始めている。

一方韓国は、水野（2003）が「韓国の方が日本よりも学歴偏重の度合いが深刻」と解説しているように「超学歴主義国」である。学業成績や大学のランク、またどこに就職できるかといった能力と進路のテーマは日本とは比較できないほど厳しいようだ。

その点ニュージーランドは事情が異なる。教育水準は高いが（青柳，2008）、それは学歴志向といった形ではなく「調和のとれた発達と学習力の育成」といった教育理念が幼時から成人に至るまで準備されている。そのため国家資格や学士号なども個々のペースで獲得してさえ行けば、国内どこでもその資格が認められ通用するようだ。また技術獲得中心の実践大学に進んでも単位の獲得次第でアカデミックな大学院に進学することもできる。そうした教育事情があれば、日本や韓国のような必要以上の受験戦争は無意味に近いものとなろう。

こうしたお国事情を踏まえて大学生生活不安尺度結果を眺めると、「日常生活不安という漠然とした不安を抱える大学生」はどの国にも見られた。この「日常的な漠然とした不安を抱える学生」というのは、アイデンティティの拡散や自信欠如など何らかの心理的課題を持つ者と言い換えることもでき、こうした心理的課題を持つ若者の存在は三国に共通して存在することが言える。

次にニュージーランドと比べ、日本や韓国では日常生活不安や評価不安が高くなっている。各国の調査を実施した2007年～2009年にかけては現在と同様世界的に好景気とはいえず、失業率を見てみても各国ともに横ばいあるいは上昇傾向にあるが、本研究の結果からはニュージーランドの大学生と日本・韓国の不安尺度の総合得点や日常生活不安得点に明らかな差が出ている。この背景には二つの視点が考えられる。第一の視点はニュージーランドはかつての「完成した福祉国家」の様相（青柳,2008）が今なお残っており、未だに日本や韓国よりはるかに社会保障が充実している点である。第二の視点は、各国における社会的価値観の違いである。ニュージーランドの属する西洋文化では‘個々の選択を尊重する’という考えが強く、教育制度もそれに則って整備されているため、日本・韓国に比して将来の有利性のために必死になる必要がないのであろう。この視点は大学不適應得点の結果が日本・韓国が高いことから支持される。さらに評価不安にも目を向けてみると、韓国が日本・ニュージーランドに比べて高いことが見てとれる。記述のとおり韓国の教育競争熱は相当で、出身大学や大学時代の成績でその後の進路が決定する傾向が強いため、大学生の不安を増長している可能性がある。

このように、三国とも個人の心理的課題や不安感を抱えた学生は一定量いるものの、ニュージーランドの大学生にとっては、社会保障の充実や社会的価値観から就職の難しさや失業率の高さといった社会不安が直接的に彼らを脅かすものとはならないため、大学生の一般的な不安は日韓より低くなり生きやすいものとなっているようだ。一方で、日本や韓国においては社会的価値観が大学生にとって、その大学における適應や成績、他者からの評価を気にさせ、プレッシャーを与えるものとなっていると考えられる。それでは、これらの点がニートに関する要因とどのように関わっているのだろうか、以下ではこの点を考察していく。

2. ニート意識と大学生活不安の関係における日本・韓国・ニュージーランド三国の相違点

各国のニート意識と大学生活不安得点を見てみると、各国で「自分の人生に

自分で責任を持つのは重荷だ」と答えた学生はそうでないと答えた学生に比べ、日常生活不安得点が高くなっている。このことから、各国に存在する心理的課題を抱えた大学生にとっては‘自分の責任感’について負担を感じている者が多いことが見てとれる。この‘責任感’は就職を始めとした人間関係を築き、自らの力で生きていく上で必要なものである。これは、白井がニートの共通原因として心理学的視点から述べている、若者が社会と関わり大人になる過程での困難や家族からの自立の問題と関わるものと考えられる。さらに、社会的価値観が類似している日本・韓国の二国に目を向けると「自分の人生に自分で責任を持つのは重荷だ」と答えた学生の評価不安も同様に高い。また、韓国においては「時間や責任で縛られるのは嫌だ」と答えた大学生はそうでないと答えた大学生に比べ日常生活不安が高く、日本においてもその傾向が高いことが示された。この評価不安と‘自分の責任に対する負担感’の関係から、日本や韓国の学生における‘責任に対する負担感’には両国で類似している高学歴主義やエリート志向性といった社会的価値観も影響を与えていると考えられる。もちろん、‘自分の責任に対する負担感’は心理的課題を抱える学生においても重大な影響を及ぼすと考えられる。しかし、評価不安を惹起しやすい社会的価値観は、ある程度自我の強さのある心理的課題の小さい学生に対しても影響するものになるであろう。

さらに、「自分もニートや引きこもりになるかもしれないという不安がある」という直接的なニート不安に関して、日本や韓国において日常生活不安得点が高い学生が多いことが明らかになった。一方で、ニュージーランドではニート不安がある学生とない学生の日常生活不安得点には差がみられなかった。この違いに関しては、先述の国としての社会保障のありかた、つまり、心理的課題が大きく社会にうまく適応できず生活に困っても守ってくれるものがあるかどうかの安心感が見てとれる。また、韓国においてはニート不安に関して日常生活不安だけでなく、評価不安や大学不適応感の得点も高いことが明らかになっている。さらに、日本においても明確な差はないがその傾向が見てとれ、この二国においては心理的課題だけでなく学歴志向性の傾向が高いという社会的価値の要因がニートと関連しているだろうことを支持する結果が得られている。

【まとめ】

本研究の結果からはニート意識と大学生活の不安の関連として以下の4点が考察された。

- ①日本・韓国・ニュージーランドのいずれの国にもニート予備軍となりうる心理的課題を抱える若者が一定数存在する。
- ②ニュージーランドにおいては国レベルでの社会保障のあり方により、社会不安があっても若者の心を直接脅かすものとはなっていない。
- ③日本・韓国・ニュージーランドのいずれの国においても心理的課題を抱える若者にとっては、社会に出て人間関係を築き自立した生活を送るのに必要な‘責任感’が負担となっている。
- ④日本や韓国においては、心理的課題だけでなく二国に共通する社会的価値観が若者に負担感を与えている。

考察された4点から、ニュージーランドではニート予備軍に対する手立てとしては心理的課題を抱える大学生の心理的ケアで十分な一方で、日本・韓国では心理的課題を抱える大学生の心理的ケアに加え、職業斡旋や職能訓練などの充実や生活に困窮した者に対するシェルターといった社会的な援助が必要であり、今後の課題であると考えられる。

【参考文献】

- 平成 21 年度版労働経済白書 2010 厚生労働省
- 若年者キャリア支援研究会 2003 若年者キャリア支援研究会報告書 厚生労働省職業能力開発局
- 白井 利明 2005 迷走する若者のアイデンティティ フリーター，パラサイトシングル，ニート，ひきこもり 上里 一郎（監修） ゆまに書房
- 玄田 有史 曲沼 美恵 2006 ニート－フリーターでもなく失業者でもなく 幻冬舎
- 日本ニュージーランド学会編 1998 ニュージーランド入門 慶應義塾大学出版会
- 池本健一 1998 ニュージーランド A to Z 丸善

- コリアンワークス 2002 「日本人と韓国人」なるほど事典 PHP 研究所
- 水野 俊平 2003 韓国の若者を知りたい 岩崎書店
- 寺井さち子 2007 日本のニート予備軍における生活意識調査とその心理的解
析—その1— 医学と生物学 第151巻 第10号 343 - 349
- 矢幡 洋 2005 働こうとしない人たち 中央公論新社
- 三橋 貴明 2008 トンデモ! 韓国経済入門 PHP 研究所
- 青柳まちこ 2008 ニューージーランドを知るための63章 明石書店
- 池上正樹 2010 ドキュメント ひきこもり 宝島新書
- 河内 淳 世界経済のネタ帳 <http://ecodb.net/>

